

神戸市シルバーカレッジ「うたこえ大祭典」記念誌

震災10年「神戸からの発信」応募作品

数知れない悲しみを越えて

生活環境11期生 菅田 忠志

二〇秒足らずの激震が神戸の街を地獄と化していった一九九五年一月一七日午前五時四六分。長い一瞬だった。苦しい年月トシツキがはじまる一瞬となった。

その後も一月一七日の『あのとき』は毎年確実にやってきて、十年が過ぎようとしている。

三度目の冬のあの日を迎えた頃だったろうか。あんなに広く明るくにぎわっていた長田区大正筋商店街の道。冷たく暗く、そして細くさえ感じてしまうようになつた同じ夜道を歩きながら、「なぜ神戸で…」「なぜこの街が…」と何度反すつしたことが。どんなに苦しかったことだろう。どんなにせつな

- 1 -

い思いの中で『無力な時』を過過ぎこさなければならなかったことだろうか。

忘れることのできないあのとき体験した恐怖、たくさん見聞きした悲惨な情景を思いながら、街角ごとに立ち止まり、なかば祈る気持で確認してみてもとつていかつての面影はみじんも残ってはいなかった。ただ無情な暗闇の世界だけが横たわり、冷たい風がこの街の名残をさらに打ち消すように吹いていた。

やはり若者は頼もしかった。全国から多くの若者がボランティアに掛けつけてくれた。その力に励まされ、なえかけていた神戸の人たちも気力を振り絞って立ちあがった。復興というにはあまりにも道が遠くに見えたが、彼らの動き回る姿に「感謝とこころのきずな」を強く感じながら…。

「おばさん 大丈夫け？無理せんと休んどんよ」「わあ 一階がぺしゃんこやなあ…。ちよつと時

- 2 -

間がかりそうやけんど、下敷きになった仕事の動力
ミシンは全部あんじょう出したるで……」「ありがと
う……ありがと」「このことばを何度も何度も口から
押し出した。

街のあちこちで若い力が活躍した。いろいろな
まりの言葉も飛び交った。

あとき差し伸べてくれた温かい手が、遠くにも
やって見えていた復興の道のりをどんなに近づけて
くれたことだろう。

戦後の日本であのときほど世間が「若い力」を頼
もしく思ったときはなかったのではないだろうか。
阪神・淡路だけでなく、このきずなはおそらく全国
にこだましていったに違いない。あとき示してく
れた「若者の熱いこころときずな」は、決して忘れ
ない。

いつの世も、年配者からはなにかと批判されがち
な若者たちだが、世代間の隙間はある意味では自然
な現象。若いエネルギーは、ときには回り道をしな

から進むのだろうが、進む方向だけは見誤らないで
欲しい。

人のこころを通い合えることの大切さ、心のきず
なの素晴らしさを見失うことなく、これからの日本
を背負っていつてもらいたい。

「この心はこれからも固く引き継がれてゆくことを
信じ、彼らにこれからの日本を託してゆこう。」